

「地球文明」の肖像——比較文明学の旅路から

吉澤五郎

※本稿は2014年9月16日、日本青年館（東京・新宿区）で行われた講演に加筆していただいたものです。

皆さん、こんばんは。今回の統一テーマは、遙かなる「地球文明への道」ということです。ところで、この「地球文明への道」とは、いったいどういう道でしょうか。と申しますのも、たしか10年ぐらい前ですが、NHKで「文明の道」という特別番組が組まれたことがありました。いわゆる、海陸にわたる壮大なシルクロードを舞台に、その文明興亡史が彩る「交流と融合」のド

ラマを描いたものです。ここでは、かのアレキサンドロスやモンゴルの道などが登場します。このように世上に名高い道であれば、きっと皆さんも定かなイメージを結ぶこともできましょう。あるいは、すでにその旅路につかれた方もおいでになるかもしれません。その点、今回の「地球文明への道」のほうはどうでしょうか。何分にも、天空の一惑星たる「地球」に向かうかのように途方もなく遠大な感じがします。正直に申して、何かつかみどころのない茫漠たる思いで参加された方も多いのではないのでしょうか。しかも、いまの



吉澤氏は日本における「比較文明学」の先覚者のひとり。西欧中世文化史、巡礼文明論の研究でも著名

時間帯はちょうど「聖なる晩餐」のひとつ時であります（笑い）。皆さんの中には、きっと悲壮な決意で夕食を後回しにし、あるいは断食の覚悟でお出向きになった方もあるのではと案じております。まずは、今回の統一テーマ「地球文明への道」のもとに、あえてご出席された皆さんの勇断と志の高さに敬意を表したいと思いであります。

「地球文明論」事始めと詩聖タゴール

ところで、第1回となります私のテーマは、『地球文明』の肖像——比較文明学の旅路から」と題しております。まだ、私自身も、その未知の旅立ちに心の戸惑いもあります。今日は、主として歴史学とくに新たな比較文明学の立場から、悠久なる「地球文明」の肖像を描き、その想いを託した旅路の一端をご報告できたらと考えます。それでは、さっそく私なりに歩んだ「地球文明」への旅路に、その試練と希望の道行にご案内しましょう。

まず、今日の講演では、大きな柱となる「3つの論点」

があります。はじめは「地球文明の命名と展望」です。すなわち「人類文明史」を新しくどう読みかえるか、との探索です。続いて「グローバル危機の浸透と課題」です。今世紀は果たして「人類最後の世紀」となるのだろうかとの疑念です。さいごに「聖なる旅の比較文明学」です。人類をひとつに結ぶ陽光のもとに「共有遺産」を求める旅立ちです。

はじめに、新たな「地球文明の肖像」を掲げる「プロローグ」のことばをご紹介します。じつは、今回の統一テーマである「地球文明への道」をめぐる、何かその奥義を象徴するような「至言」はないか、と考えあぐねておりました。そのとき、ふと脳裏をかすめたのが、インドの詩聖と謳われるラビンドラナート・タゴールのことばです。皆さんも、世界的な思想家としてタゴールの名はよくご存知のことでしょう。20世紀初頭（1913年）には、いち早く「東洋人初のノーベル賞」（文学賞）を受賞しています。また、日本をこよなく愛し、その自然や芸術の琴線にふれて5度も来日しています（1916年、1917年、1924年、19

29年は2回）。ここで、最晩年の「タゴールのことば」をお伝えしましょう。

「文明の使命とは、人びとのあいだに結合をもたら
し、平和と調和を築くことである」（「文明の危機」、

1941年）

このタゴールの「遺言」ともなったメッセージは、まさに明日の全人類がともに生きる「地球文明」の道標を示している、ともいえましょう。他面、日本の近代化によりそう影として、そのアジア侵略やあくなき利潤追求への警句を秘めているともいえます。

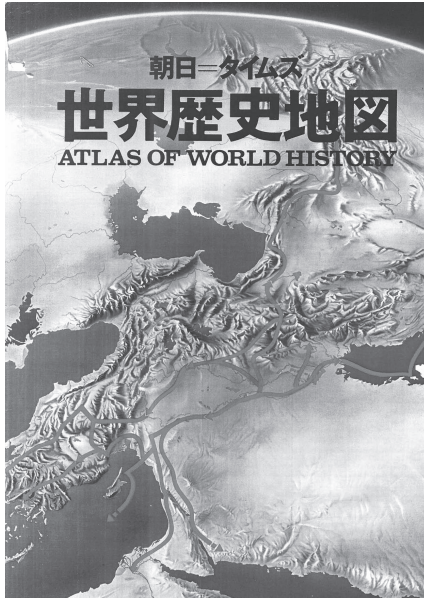
あらためて、タゴールの深い胸中と命題を心にとめながら、つぎのトピックに移りましょう。

I. 「地球文明」の命名と展望 ——「世界史」を読みかえる

「地球文明」の歴史的構想とバラクラフ

3つの論点の第1は、「地球文明の命名と展望」です。ここでは、「地球文明」というまだ多分に聞きなれない

名称の由来と意味を考えたいと思います。ちなみに、歴史学上では、「新しい世界史」の時代区分論となります。その未拓の道を切りひらいた先駆者として、イギリス歴史学協会の会長を務めたG・バラクラフがいます。その大著に『世界歴史地図』（1978年、日本語版



「新しい世界史」の時代区分を示した、G・バラクラフ著『世界歴史地図』（1978、邦訳1979）。これまでの「ヨーロッパ中心史観」に挑戦し、新たに全人類史を公平に観察しながら21世紀の「地球文明」への道を開いた名著

編集・成瀬治・山口修・三浦一郎、朝日新聞社、1979年）があります。皆さんの中には、なんだ「地図」の本ではないか、といぶかる方もありでしょう。ところが、この本の「出来栄え」について、一説には「立派な10冊の史書も、この一書の地図におよばない」と高く評されています。それは、なぜでしょうか。

ひとまず、その謎解きとして、これまでの伝統的な「世界地図」の特徴を垣間見ましょう。それは、おもに政治的な境界や事件さらに軍事的な功績等を基準にしたものです。いわば、きわめて政治地理学的なものでした。また、世界地図の見方や解釈も、往々にして自己本位の偏見にみちたものでした。その顕著な例として、たとえば北半球やヨーロッパを大きく描く「メルカトル式世界地図」（1569年）といった地図があります。現に、最近までヨーロッパの学校教育で使用されていたものです。きっと、皆さんも何がかの心当たりがあるのではないのでしょうか。余談ですが、私の知人で国際比較文明学会の会長を務めたP・ロス氏がいます。彼は、南米コロンビアの人です。したがって、学習上

の地図でも、つねにアメリカ合衆国を頭上に見上げる形で学んだわけです。ある意味で、世界史の解釈法なし慣行として、諸文明の優劣までもが、自分が住まう地図上の位置にかかわるのでしょうか。彼は、そのような自己体験に照らして、とくにその解釈上の歪曲を「空間の道徳的な差別」と呼んで糾弾していました。

話をもちますと、バラクラフの『世界歴史地図』はまさに、この伝統的な世界史観や世界地図に巣くう不条理を正そうとしたものです。その新しい世界史像の構想が、膨大な『世界歴史地図』として実ったともいえましょう。バラクラフのこの著書は、自ら冒頭（「はじめに」）に語るように、何よりも「現代の重大な変化に対する、新しい世界史観の提供」を主眼としたものです。聖書の言葉になぞらえれば、「新しいブドウ酒は、新しい皮袋に」（「マタイ福音書」9・17）ともなりましょう。そこで、歴史学上の新しい「世界史区分論」として、バラクラフの広大な構想を一瞥するしてみましょう。彼は、とくに「歴史地図」という「視覚」に訴える独創的な手法から、今日の「地球文明」にいたる文明興亡史を

明かしています。

いわゆる、人類文明史上の黎明から今日にいたる世界史上の「主要な変化」について、つぎの「7つの時期」（セクション）に分けて考察します。その全容を概観しましょう。すなわち、「1、初期人類の世界（石器時代の狩猟者から農業の拡大まで）」「2、諸文明の時代（BC 3000・BC 1000）」「3、ユーラシアの古典文明（BC 1000・AD 500）」「4、分裂・割拠の世界（AD 500・1500）」「5、ヨーロッパ興隆の世界（1500・1815）」「6、ヨーロッパ優位の時代（1815・1914）」「7、全地球文明の時代（第2次世界大戦後の植民地主義の衰退や超大国の出現および冷戦等をみる今日まで）」となります。

このように、バラクラフは、近代歴史学上の「西欧中心主義」を脱却し、広く人類文明史上の変動を投影する「新しい視点」を提供しています。事実、従来にみる「世界史地図」の大半は、とくに「中心としてのヨーロッパ」に重点をおき、その周辺地域の登場は付随的で従属的なものでした。逆に、バラクラフの場合は、

一時代や一地域といった個々の事象にとどまるものではありません。むしろ、多様な文明の出会いと相互関連を重視しています。地球上のあらゆる時代と地域を背景にし、その全民族の成果を公平に見つめる「普遍的な歴史観」を築いています。たとえば、眼前にそびえる「ヨーロッパ文明」へのえこひいきを慎み、不運にも世界史の「辺境」と目された「アジア・アフリカ諸文明」にも多くの光を当てています。ちなみに、「極東」と名指された日本も例外ではありません。

本来、歴史の歩みは、不動の静的なものでなく、たゆみない変化の動的過程であるといえましょう。このように、バラクラフが、とくに歴史学の実証的な立場から、これまでの西欧中心史観を超えて「歴史の余白」をうずめ、今日の「地球文明」を見える新しい世界史像を築いた意義は大きいといえましょう。申すまでもなく、今日の歴史的情勢は、全人類を単一の家族とし、共通の希望と恐怖をわかちもつ根本的な変動期に直面しています。もはや、人類が向かう「希望の未来」として、バラクラフの説く「地球文明の時代」という

視点を欠くことはできません。

新しい「世界史」像とマクニール

つぎに、新たな「地球文明」の構想に挑んだ「もうひとりの歴史家」として、アメリカの歴史学会会長を務めたW・H・マクニールの貢献も見おとせません。代表的な著作として、『世界史』（1967年、増田義郎他訳、新潮社、1971年）があります。この本は、現在大幅に加筆されて文庫本（上下巻、中公文庫、2008年）として再刊されています。読書界では、人類史を一望する「魅力あふれる壮大な物語」として大きな話題をさらっています。また、新たな読者層として女性や若者の関心も深いようです。きつと、いまだ不透明な「地球文明」の未来を案じ、明日の希望となる歴史の教訓と知恵を探し求めているのでしょうか。皆さんの中でも、すでにお読みになった方もおありでしょう。

ところで、マクニールの場合も、先のバラクラフと同様に「西欧中心史観」を脱皮し、全世界史を「4つの時期（パート）」に分けて考察します。すなわち、「1、

ユーラシア大文明の誕生とその成立（BC3500-BC500）」「2、諸文明の平衡時代（BC500-AD1500）」「3、西欧文明の優勢（1500-1850）」「4、地球規模のコスモポリタニズムのはじまり（1850-）」となります。申すまでもなく、最後の「第4期」は、歴史上の「西欧文明の優勢」（3期）を超える道として、先にみたバラクラフの「地球文明の時代」に相当するものです。その他にも、マクニール独自の観察を見ることもできましょう。たとえば、世界史の第1段階（第1期）にみる「中東文明」の重視をはじめ、依存的な文明としての「周辺文明」の設定（第2期）、さらに近代における「西洋化」の背景等が、見事な歴史的なバランスで描かれています。

これまで粗描したように、英・米歴史学会の双壁をなすバラクラフとマクニールは、まず新たな世界史研究の基本単位を「文明」としています。さらに、諸文明の因果関係と相互関連を巨視的にとらえようとしています。いわゆる、ランケ以来の「近代歴史学」に巣くう「西欧中心史観」や「一元的発展論」の克服です。

とりわけ、世界史上の文明変動に注目し、諸文明の比重をあるがままに描写しています。それらの基本構想と画期的な業績は、人類史の命運を託した「地球文明」の歴史的な位相と方位を示している、といえましょう。もとより、ひとりの著作家が壮大な世界史を書きとめることは、きわめて困難な業でもありましょう。バラクラフ自身も告白するように、ときには歴史家の「大がかりな誤解」を招き、また専門家の「袋だたき」にあうかもしれません。その悲運は、往々にして先駆者が背負う宿命なのでしょうか。

ところで、第2次世界大戦後にみる現代史学の潮流は、伝統的なヨーロッパ史像の反省と超克を原点としています。その意味で、いち早く歴史の真実に向けて新しい知的冒険を試み、今日の「地球文明」への窓を開いたふたりの業績は大きいといえます。

「比較文明学」の誕生とトインビー

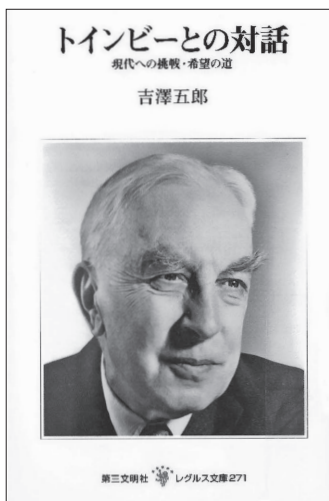
このような、新たな総合的視点と体系的叙述は、いわゆる「歴史学の再構成」の問題として浮上すること

になります。いわば、真の世界史的な立場に立つ「歴史の蘇り」は、むしろ歴史学の彼方に新しい「比較文明学」の誕生をうながす契機となった、ともいえましよう。事実、現代史学の重鎮であるバラクラフやマクニールと共通の認識に立ち、むしろ両者の史観に影響を与えながら、独自に比較文明学への道を開いたのが、ほかならぬA・トインビーです。ちなみに、バラクラフの『世界歴史地図』の構想は、当初、トインビーとともに練られたものです。またマクニールの『世界史』の着眼も、トインビーの学風に導かれたところが多い、といえます。新たな学的志向として、壮大な「地球文明論」にいたる比較文明学の形成は、まさにトインビーの先導性と知的遺産に負うものといえましよう。

ここで、あらためて「比較文明学」の知的核心にふれましよう。まず、その「学名」に冠する「ふたつのキーワード」があります。第1に、研究対象となる「文明」とは、全人類史を鳥瞰する「全体性の視点」です。第2に、研究方法となる「比較」とは、全地球文明の自觉に立つ「関係性の認識」です。今日、21世紀の使命

志向科学として、一専門分野をこえる超領域的な研究と全地球的な実践課題を負うことは申すまでもありません。1961年には、その歴史的な開幕を告げる「第1回国際比較文明学会」(オーストリア・ザルツブルク)が開かれました。同学会の初代会長P・ソローキンに乞われて、トインビーも理論的指導者として出席しています。その折の「記念シンポジウム」のテーマには、新しい学問の知的構図や「世界史の問題」とともに、早くも地球文明を討議する「ひとつの世界」が登場しています。

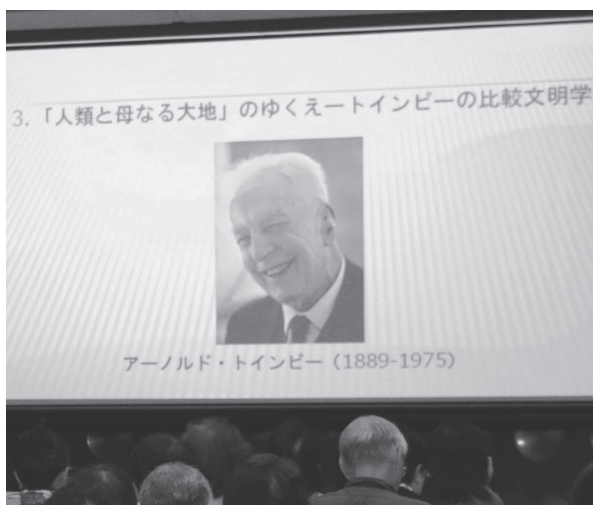
トインビーは、世に「20世紀最大の歴史家」あるいは「20世紀の良心」とも謳われています。それこそ、大の「親日家」としても知られています。また、戦前・戦後を通じて3度(1929、1956、1967年)来日しています。皆さんも、きっと何らかの縁でご存知の方も多いでしょう。1968年には、日本政府より「独自の世界観を通じて、日本文化の向上に貢献した」として「勲一等瑞宝章」を受賞しました。本日は、ここにトインビーの「写真」を掲げております。



吉澤氏の近著『トインビーとの対話』の表紙。1960年代頃のトインビー博士の面影を伝えている

トインビーの「肖像画」は、かつて世界的に有名なアメリカの『タイム』誌の表紙を飾ったこともありま
す。じつは、わたしの近著『トインビーとの対話―現代への挑戦・希望の道』（第三文明社、2011年）の表紙も彼の顔写真です。いかにも、現代文明の苦悩を秘めた「叡智」を象徴するかのような写真です。もつとも、今日の講演会に関しては、いとも和やかな会場の雰囲気
に資すべく、「もう一葉の写真」を選びました（笑い）。
さて、皆さんの印象はいかがでしょう。私見ですが、前者の写真とはやや趣が異なり、いかにも弱者への共

感がただよう寛容と温雅に満ちたまなざしです。こちらの方は、わたしの旧著『トインビー―人と思想』（清水書院、1982年、新装再版・2015年）の扉に掲載した写真です。今でも、わたしの一番身近な書棚を飾り、何かと移ろう心のやすらぎと創造の源泉となるものです。



講演会では、講師が身近に置いて、「希望の『対話』になる」というトインビー博士の肖像写真がパワーポイントで紹介された

ところで、トインビーには、よく「ふたつの名著」があると言われます。そのひとつは、名著の誉れ高い『歴史の研究』（全12巻、1934-61）です。他のひとつは、不動の声価を得ている『国際問題大観』（1925-1952）です。いずれも、第一次世界大戦の勃発という、歴史の危機に対する主体的な対決を秘めています。別言すれば、世界文明史上の挫折要因ともなる「戦争体験」を契機としている、ともいえましよう。その知的挑戦は、新たな世界史および国際問題の探究として、とくに巨視的な「文明変動論」の視野から、世界をとりまく「西洋化」の帰結と明日の「地球文明」の命運を問うものです。

このように、トインビーには、独自の「歴史的な関心」と「現在の関心」の一大総合がみられます。この「ふたつの焦点」を結ぶ高次の「ひとつの楕円」構造こそ、ほかならぬトインビー思想の特徴ともなりましよう。その包括的な視点と方法から、現代にひそむ問題の本質的な意味と新たな展望への道が開かれます。もはや、近代歴史学のいびつな「史料主義」と袂（みだ）を分かち、ま

た国際政治学につきまとう強国中心の「勢力均衡論」とも趣を異にします。今日、トインビーが、新たに「比較文明学」の先駆者とされ、また広く「国際関係論」の草分けと称されるゆえんでもあります。

今日、文字通り、ひとつの「地球文明」の時代を迎えています。とりわけ、近代の国際政治体系を問い直し、新たな国際平和と地球共生の理論を構築することが急務となりましよう。トインビーは、いち早く未来社会像として、広大な歴史的検証を背景としながら、人類存続への新たな「世界国家」（世界文明）の構想と具体的な青写真を示しています。その広範な世界史と国際政治を結ぶ歴史的知見は豊かであり、未来への洞察は深いといえましよう。現に、戦争か平和かを問うかのように、「最後の審判」の足音が近づいています。新たな「地球文明」の意味と方途について、あらためてトインビーに学ぶ意味は大きいといえましよう。

『地球文明への視座』から読むトインビー

これまで、海外および日本の新聞界は、折にふれ

インビーに大きな関心を寄せました。日本でも、たとえば世界的な大事件に際して、あるいは新年の年頭所感として、トインビーの論説が多くの紙面を飾りました。その総数は、およそ60篇をかぞえます。かつて、私もこれらの主要な寄稿論文（1953・1974年）を蒐集し、新たにテーマ別および時系列に再編成して、「トインビーの現代論集」として刊行したことがあります。その折の表題は、今回の統一テーマを予示するかのような『地球文明への視座』（秀村欣二・吉澤五郎編、経済往来社、1983年）となっています。

もはや世界史の歩みは、かの「近代ヨーロッパ」の時代から、文字通りの「地球文明」の時代に移行しています。ちなみに、本書の第1章は「日本の印象と期待」です。日本への深い関心と独創性等への賞賛とともに、いち早く経済成長下の「公害問題」や「日本国憲法第9条」の問題を危惧しております。新たに「日本とはなにか」という自省と希望の念をこめて、トインビーの挑戦に応える意味は、今なお重いとさえいえましょう。なお、その他の主要項目として、「Ⅱ、国際政治と世界

の平和」「Ⅲ、現代文明の試練と課題」「Ⅳ、未来の世界を考える」等がつづきます。まさに本書は、今も根強いナショナリズムの亡霊を超え、新たな「地球文明」に挑む人類の試練と道標を示すものです。あらためて、トインビーの偉業にふれて、「彼は死すれど、今なお語る」との感慨を深める昨今です。

なお、新しい世界史への希求として、私なりの「地球文明」論を収めた一書もあります（『世界史の回顧——比較文明の視点』、世界思想社、1999年）。その主眼は、これから旅立つ「地球文明」の全体的な構図と新たな方位を描こうとするものです。まず「総論」として、その座標軸と方法論を見さだめつつ、つぎに「各論」として、アフロ・ユーラシアから西欧・日本文明にわたる8文明の歴史的検証を試みたものです。じつは、「総論」の第1章（3）のタイトルが、今日の講演に用いた「地球文明の肖像」です。その主内容のひとつに、先ほどご紹介した「新しい世界区分——マクニールとバラクラフ」を論じております。また、関連事項として、「アジアの歴史的位相」や「地球文明と宗教的展望」等

を検討しています。いずれも、21世紀の文明変動論として、新たな「地球文明」と自己変容の道を探索したものです。

本日の講演会では、冒頭で東洋哲学研究所の川田洋一所長から、今回の統一テーマ「地球文明への道」に関する該博な趣旨説明がありました。その折に、図らずも拙著のご紹介をいただきました。とくに、本書中の1章「地球文明の肖像」が、本講座の「誘い水」の一端をなしているとのごあいさつに、あらためて身の引きしまる思いであります。

『二十一世紀への対話』と生への選択

さらに、21世紀の「地球文明」を語る希望の書として、トインビーと池田大作氏の対談『二十一世紀への対話』（日本語版—上・下巻、文藝春秋、1975年、英語版—講談社インターナショナル、1976年）があります。すでに、会場の皆さんの多くが、いち早く手にとり、熱い思いで読まれたのではないのでしょうか。ちなみに、トインビーの命名になる本書（英語版）のタイトルは、『旧約

聖書』（申命記）に由来する「生への選択」（Choose Life）です。この和・英の両書に冠されるいずれの表題も、一種の「黙示録」や「末法思想」の予感を秘めて時代の転換を照らしている、あるいは私たち自身の新たな決意をせまっている、ともいえましょう。

同書の意図は、トインビーから池田氏に寄せられた「一通の書簡」が示すように、より広く「人類が直面する基本的な諸問題を討議する」ことにあります。主内容のひとつに、第2部の「政治と世界」があり、その第4章の原題は「One World」（ひとつの世界へ）です。また、関連テーマとして、たとえば「東アジアの役割」「中国と世界」「世界統合化への課題」など、世界史の未来を語るトインビーの最終見解を取めています。アジアと日本の命運をかけた「地球文明」への探求として、きわめて貴重な文献といえましょう。

かつてマクニールは、親交の深いトインビーの死を悼んで、自ら長大な伝記『アーノルド・トインビー—その生涯』（オックスフォード大学出版局、1989年）を著しています。とりわけ、トインビーの人となりと多

「地球文明史」の転換と環境革命

彩な業績を回顧して「20世紀のもっとも注目すべき思想家」とし、また文字通りの「真の世界人」(World Figure)と評して、同書を結んでいます。なお、ひと言加えますと、同書の巻末(結語)では、とくに晩年のトインビーとアジアの「仏法思想家」との異色の対話として、本書(「二十一世紀への対話」)にも大きく注目しています。

他面、わたし自身も、最近の『トインビーとの対話』の中で、いわゆる代表的な「日本人との対話」(第IV章・3)の一環として本書を紹介したことがあります。また、ある時は、「二十一世紀への対話—40周年」の記念号(「聖教新聞」2012年1月1日付)に際し、急ごしらえの一文を草したこともあります。その折の見出しは、本講演会の誘いともなる「地球文明への希望の光」というものでした。ご承知のように、先の「対談集」はすでに日本語版・英語版をはじめ、世界の28言語に翻訳されていることです。このように、世界の知性と良識を育む新たな潮流は、きっと「地球文明」の黎明を飾る希望の門出ともなりましょう。

これまで、「地球文明」の命名問題として、その先導的な役割を担った「比較文明学」の知的景観をあとづけてみました。いわゆる、トインビーを先達とするバラクラフやマクニールの歴史的な構想です。ここで、もうひとりの優れた日本人の業績として、伊東俊太郎氏の「地球的文明史」像について検討しましょう。伊東氏は、日本の科学史学会会長および比較文明学会初代会長、さらに国際比較文明学会会長等を歴任した著名な科学者であり、文明史家でもあります。その膨大な学問的成果は、このほど『伊東俊太郎著作集』(全12巻、2009・10年、麗澤大学出版会)として刊行されました。まさに、知の秀峰としてそびえる記念碑的な大作です。早速、朝日・毎日等の新聞紙上でも大きく紹介されました。私も微力ながら編集委員のひとりとして、その気宇壮大な学術的挑戦と卓抜な精華について「書評論文」(「比較文明研究」14、2009)として寄稿したことがあります。

この『著作集』の第1回配本は、じつは『比較文明論Ⅰ』です。同書の第3章には、独自の「新しい人類史の時代区分」が収められています。いわゆる、人類文明史上の大きな画期を検証する「人類史5革命説」です。そこでは、次のような「5つの革命」が登場します。すなわち「1、人類革命（人類の成立）」「2、農業革命（農耕の発見）」「3、都市革命（都市の成立）」「4、精神革命（哲学者や普遍宗教の誕生）」「5、科学革命（近代科学の成立）」となります。

ところで、私たちの身近な関心事ともなる、いわゆる現代文明の「画期性」とは何でしょうか。伊東氏の時代区分論では、とくに第6の転換期として、新しく「環境革命」の時代を迎えることになります。いわば、これまで西欧文明の優位を支えた「科学革命」の帰結が、いまや広範な「地球環境問題」の暗雲として大きく問われることとなります。

このような、「環境革命」ともいうべき今日の挑戦に、わたしたちはどう応えるべきでしょうか。伊東氏は、その問題解決の鍵概念として、とくに「人間革命」へ

の道を説きます。いわゆる、「人間」の所与性と尊厳性のはざまで、いかに「科学技術」の人間化を図るか、あるいは「物と心」を統合する新しい文明の原理を創出するか、との問いかけです。それこそ、全人類的な「地球文明」の道標として、とりわけ人間の生き方や価値観の変革を求める「人間革命」にほかなりません。

つい最近のことですが、伊東氏の旧著『比較文明』（東京大学出版会、1985年）が、新たに「名著復刊シリーズ」（UPコレクション、第1回配本、2013年）として刊行されました。同書は、新たに「人類共存」を志向する学問分野として、あえて「比較文明」の名を冠した最初の著作でもあります。当時の時代不安を背景にと申しましょいか、まさに時宜をえて大学の教科書としても多く採用されました。じつは、先ほどご紹介しました「新しい人類史の時代区分」（1-3）が、いち早くここに収められているのです。伊東氏の壮大な「地球文明史」の構想として、その先見の明と全体的な知見に、あらためて感銘深きものがあります。

なお余談ですが、同書の最終章（Ⅳ）には、新たな

比較文明学の船出を飾るかのように、伊東氏の対談集「比較文明論の対話」が見られます。と申しますのも、じつは伊東氏を初代会長とする「比較文明学会」が、刊行の2年前（1983年）に発足したばかりだったのです。そこには、日本の知的巨匠ともいえる梅棹忠夫氏や中村元氏との対談が収められています。両対談ともに、人類共存の理念と学問的な可能性を新たに問う、高貴にして深遠なる対話の風景が見られます。じつは、その一末席を汚すにすぎませんが、伊東氏とわたしとの対談も含まれています。その折のテーマは、今日の講演テーマの序奏ともなる「地球時代の文明史像」でした。いま思えば、ちょうど30年ほど前に発信した「地球文明」への一メッセージともいえましょう。

II. グローバル危機の浸透と課題 ——「人類最後の世紀」を超えて

人類文明史の「折り返し点」として

ところで、新たな21世紀の開幕は、同時に「第3の

千年紀」を告げる一大転機ともなりました。いわゆる、人類文明史の根本的な変容として、広範にわたる重大な問題を投げかけています。ちなみに、西欧史上の「千年紀」（ミレニアム）問題は、たんに千年の時代を画する数値というより、むしろ「世界の終わり」にたいする一種の恐れと期待を秘めています。果たして、これまでの人類史上に染む人間の罪の贖罪と、新たな恩寵の道はかなうのでしょうか。その意味で、21世紀の人間環境は、ちょうど人類文明史の「折り返し点」にあるともいえましょう。

このような、迷える「現代文明」の特性と申しますか、時代の苦悶をいち早く胸に刻み、象徴的な大作に挑んだのがポール・ゴーギャンです。その有名な画題は、「我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか」（1897-98年、ボストン美術館所蔵）と問いかけます。本来、門外不出とされる名作ですが、数年前（2009年）に東京国立近代美術館でも公開されて大きな話題となりました。また、NHKの番組「シリーズ・世界遺産100」のタイトル原画ともなつて

いますね。きっと、皆さんもおなじみのことでしょう。いまは深く立ち寄るいとまもないのですが、少々「作品鑑賞」へと向かいましょう。

申すまでもなく、ゴーギャンは、フランスの後期印象派を代表する世界的な画家です。その絵画の深層には、「人間存在」に関する深い思索と洞察が刻まれています。とくに、この代表作は、彼が自殺を図る直前に、いわば絶望の淵に身を投じて完成した「精神的な遺言」でもあったのです。申すまでもなく、ゴーギャンの「最高傑作」と目される作品です。

ところで、この作品が表象するものは何でしょうか。ちなみに、通常の解釈では、人間の一生を、すなわちその「誕生・成長・死」にいたる不可避な運命を描いている、ということになります。大変わかりやすい説明ですね。たしかに、大きな画面の全景には、向かって右側に安らかに眠るまだ幼い赤ん坊が描かれ、中央に両手を空の彼方に向けて果物を摘む神秘的な少女、左端には亡霊の影のように頭を抱えこむ老女が佇んでいます。いわゆる、人間の誰しもがたどる「人生の三

段階論」となります。

しかし、その広大な画布の底には、森かげの暗い微光にうちしずむ、病める「人間と文明」にたいする根源的な問いが刻まれている、ともいえましょう。まさに、ゴーギャンの主題は、人間と文明がやどす「生と死」への問いにあったのではないのでしょうか。いま、このゴーギャンが、多くの謎とともに提示した世紀末の警鐘が、新たな重みをもつて時代の転換期に鳴り響いている、ともいえましょう。このようにゴーギャンの遺作の意図と申しますか、本質的な意味を解することもできましょう。本日のテーマにとつても、やはり21世紀の「地球文明」を育む精神的なメッセージとして、あるいは人類史の「折り返し点」を象徴する画題のひとつとして、ぜひ記憶にとどめたい作品です。

「グローバル危機」と人間の安全保障

古来、人類社会の常として、どの時代にも特有の危機意識がひそんでいるといえましょう。一説では、この「危機」(クライシス)という言葉の語源は、ギリシア

語の「カイロス」に由来し、神との出会いや運命の時を意味するようです。ところで、今日、世界的に広がる深刻な危機を称して、とくに「グローバル危機」と呼んでいます。いわゆる、一方では、地球全体を覆うグローバルゼーションの波が急激に押し寄せています。また他方では、人類文明史の逆説ともいえる「負の遺産」が大きく立ちはだかっています。現に、身近な生態学的問題群として、気候変動をはじめ、環境汚染、資源枯渇、種の絶滅等の暗雲が垂れこめています。いずれも、自然そのものの変動というより、むしろ人間の貪欲信仰が蒔いた種ともいえましょう。いまや、人間の生命や暮らしそのものの危機が案じられる事態ともなりました。あたかも、新たな「地球文明」のゆくえをかけた「運命の時」を迎えるかのごとくです。

この、焦眉の「グローバル危機」の問題については、すでに国連大学学長を務めた武者小路公秀氏等による優れた論考があります。その主旨は、かならずしも「グローバル化」の全面否定というわけではありません。むしろ、重要な課題は、21世紀の根本的な視座として、

ほかならぬ「人間の安全保障」を優先するという見地です。すなわち、今日にはびこる政治経済や覇権の構造を改良して、新たに「人間の顔」や「人間の心」をやどすグローバル化へと軌道修正することです。

ここで、武者小路氏に準じて「グローバル危機」の様相と意味を確定しましょう。それは、おもに大きな「3つの危機」が、しかも全体として連動するというものです。すなわち、「1、政治経済の危機（5百年）」「2、文明の危機（5千年）」「3、生活・生命の危機（5百万年）」です。およそ「グローバル危機」の真相は、このように時間系列の異なる「三つ巴の危機」が、しかも同時に進行するという前代未聞の事態にあるのです。21世紀を覆う「グローバル危機」が、人類文明史上の「最大の危機」と称されるゆえんでもあります。

ひと言、今後の「グローバルゼーション」研究の課題にふれたいと思います。まず、近代社会科学の問題関心と申しましょうか、たとえば「近代主義」や「経済主義」に偏らない多次的な視点が必要です。さらに、広く人類文明史を鳥瞰する巨視的な把握も不可欠

でしょう。その有望な論峰の一角として、R・ロバー
トソンが主張する「宗教的アプローチ」(『グローバリゼー
ション—地球文化の社会理論』、1992年、阿部美哉訳、東
京大学出版会、1997年)があります。彼は、おもに宗
教社会学の立場から、世界史上の歴史形成に果たす宗
教的な「超越価値」の役割を重視しています。いわゆる、
近代社会で軽視された宗教・文化的な要因にも光をあ
て、また「非西欧世界」の歴史的な活力と国際的な参
入にも注目しています。なお、同書の訳者である阿部
美哉氏は、いち早く「比較文明学」の重要性を指摘し、
A・トインビーや山本新氏等の先駆的な業績を紹介し
ています(訳者あとがき)。本書は、永遠の課題ともいえ
る「宗教と文明」の深遠な関係と新たな方途を説く、
出色の書といえましょう。

「今世紀で人類は終わる」のか？

ところで、このような「グローバル危機」の波紋は、
地球環境のみならず文明社会の内部崩壊を告げる「破
滅論」を生んでいます。そうしたなかで、今日特有の

「21世紀問題」として、大変ショッキングなタイトルの
本が刊行されました。その話題の書は、マーティン・
リースの『今世紀で人類は終わる？』(2003年、堀千
恵子訳、草思社、2007年)です。すでに、第一級の宇
宙物理学者が描く「世界終末のシナリオ」として、お
読みになった方もおいででしょう。とりわけ、21世紀
の脅威として、一方に身近な核拡散や地球温暖化とい
う難問を抱えています。さらに、新たな問題として「予
想外の顛末」^{てんまつ}が待ちうけている、との診断です。それは、
近年の高度な科学・技術知識の普及や核の闇市場出現
等によって、ほかならぬ非国家的なテロ組織や個人に
よる偶発的な戦争を誘いかねない、との危惧です。現に、
全世界を震撼させた「米同時多発テロ」や、有害なウィ
ルスをばらまく「バイオテロリズム」への懸念も深い
といえましょう。

このような「予想外」の新しい事態は、従来の国際
法規や国家間の管理を免れた個人のしわざともなりま
す。いわば、世界滅亡の引き金はたったひとりでも引
ける、ともなりかねません。長期的な未来展望として、

個人による偶発的な大惨事や人類の滅亡も、あなたが否定できません。まさに、21世紀文明の奇形として、「地球史上最大の危機」を告げているともいえましょう。

そこで、マーティン・リースは、広く宇宙的な視点から「人類最後の世紀か?」と問いかけています。かつて、世界的に著名な文化人類学者・レヴィ・ストロースは、「世界は人間なしに始まったし、人間なしに終るだろう」と予見しました(『悲しき熱帯』1955年、川田順造訳、中央公論社、1977年)。いわゆる、人間の傲り(おごり)に対する厳しい自戒の念ともいえましょう。マーティン・リースは、あらためて生命史全体の行く末を見えながら、新たな「共生価値」の創出を強く要請しています。まず、人間自身の知性の向きを転換させる。たとえば、強者の欲望の制御や生物多様性の保全に、もつと心を傾けるべきでしょう。さいごに、新たな「地球文明」が「今世紀を生きぬけるかどうか」と自問しながら、その可能性は「ほぼ五分五分である」と推測しています。すなわち、今後わたしたち自身が選ぶ生き方や行動のいかんである、ということになります。

う。今日、マーティン・リースの、このような科学者としての深い内省と「人類文明終焉」への重い警鐘にも、ぜひ耳を澄ましたいものです。

総じて、21世紀の「文明的な位相」とはどのようなものでしょうか。まず、これまで人類が達成した多様な遺産を、とくに地球文明の視座から総体として見なおすことです。いわゆる、人類文明史の「折り返し点」ともいべき一大転機にあるといえましょう。その現代的な表象は、K・ヤスパースにちなむ「第2の枢軸時代」とも称されます。また、私自身は「新約聖書」の靈感から「第2の黙示録」の時代と呼んでいます。いずれも、人類史上の新たな「精神的開眼」を説くものです。いわゆる、全世界史の地平から、今日の終末的な危機の意味と本質を明かし、かつ人間の根源的な反省と自己超出を呼びかけたものです。

ここに、あらためて歴史の深層を省みるとき、世界史の現実とは、たとえ苦難の道程であっても、かならずしも必然的なものではありません。かつて、「ノーベル平和賞」(1979年)を受賞したマザー・テレサが身を

もって示したように、わずかな「一粒の麦」として自分が変わることによって世界も変わる、ともいえましよう。いま、あらためて「地球文明」にのぞむ心得として、私たちもこの歴史の教訓に学びたいものです。

「なぜ戦争はなくなるのか？」

これら一連の「地球の問題群」に関して、私自身は先ほどの『トインビーとの対話——現代への挑戦・希望の道』の中で、ある1章を設けたことがあります。それは同書の第5章で、タイトルは「二十一世紀を読む——『人類と母なる大地』のゆくえ」としております。

参考までに、ここでの主要な論点を順を追ってあげてみましょう。すなわち、「戦争の世紀」をこえて、「地球環境問題」の暗雲、「爆発する都市」の脅威、「グローバル化」の明暗、「文明間の対話」は可能か、「多様性の中の共生」の調べ、「アフガニスタンとイラク」に寄せて、となっています。各々に、今日にせまる「地球の問題群」の解決に向けて、おもに比較文明学の視座と道標から、また折々の自己体験も交えてまとめた「一

記録」です。

今日は、時間の都合もありますので、最初の「ふたつの問題」にしぼってお話ししましょう。第1に、「戦争の世紀」をこえてという問題です。ご存知のように、今年（2014年）は、「第1次世界大戦」の開戦から、ちょうど百年を迎えます。その苦難の1世紀をへて、果たして人類はどのような知恵を授かったのでしょうか。また、人類が相和するという「百年越しの宿題」はかなったのでしょうか。今日、新たに「第1次世界大戦」の遠近法として、あらためて不条理な戦争の意味と歴史的な教訓が問われている、といえましよう。

かつて、新設された「総合人間学会」（小林直樹初代会長）でも、この「戦争と文明」に関するシンポジウム（2009年）が行われました。いわゆる、人類史につきまとう「戦争」現象を「総合人間学」的に解明し、その全体討議を通して人間理解を深め、さらに戦争と人間および平和への道筋をさぐるとするものです。パネリストとして、山極寿一（人類進化論）、板垣雄三（歴史学）の両氏とともに、私も小林会長の要請で「比較文明

学」の立場から加わりました。その際は、おもに「戦争と文明」を主題に、危機の本質的な意味と歴史的な構図をはじめ、新たな「地球文明」への展望等について報告したものです。具体的な論点としては、まず、文明史上の「挫折論」と「段階論」から見た戦争の定位と歴史的な検証があります。さらに、文明の「未来論」として、世界史上の「分化と統合」の潮流を総観した「地球文明」の構造と方位等にふれたものです。

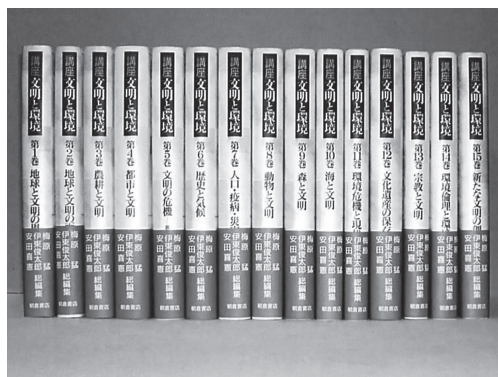
「セベリア声明」と希望のそよ風

その折に、新たな関心を集めた論点として「暴力についてのセベリア声明」（1986年）があります。ちなみに、皆さんの中でこの「声明」をご存知の方はおいででしょうか。どなたもいらっしやらないようですね。もともと、日本では、つい最近まで専門家にすら知られざる声明でした。この声明は、1986年の「国連・国際平和年」の活動の一環として、ユネスコがスペインのセルビアで開催した国際会議で起草されたものです。その前史ともなる、国際的な専門家チームによる

共同研究「脳と攻撃性」の貴重な研究成果でもあります。その後、1989年に「ユネスコ総会」で正式に採択されました。

この「セベリア声明」の重要性と、新たに投げかけた波紋とは何でしょうか。それは、「戦争は人間の本能か」と問いかけながら、もっとも新しい科学的な論拠から「戦争が生物学的な必然でない以上、平和は可能である」と明言していることです。すなわち、これまで「戦争と暴力」の正当化に利用されがちであった「生物学的発見論」への科学的な挑戦です。あるいは、人間性に関する「生物学的悲観主義」の明確な否定ともなりましょう。

総じて、「戦争は人の心の中ではじまる」と同じように、また「平和も私たちの心の中ではじまる」といえるのです。いわば、「人間」（ヒト）という同じ種の営みとして、一方で戦争を発見した種は、また他方で平和を発明する種ともなりえましょう。申すまでもなく、その未来の明暗を分かť「責任」は、私たちひとりひとりの肩にかかっているのです。いま、あらためて「地



21世紀の「地球環境問題」を超領域的に探究した「講座—文明と環境」（全15巻、梅原猛・伊東俊太郎・安田喜憲総編集、1996、朝倉書店）。とくに、自然と人間が共存する「新しい文明パラダイム」を提示した画期的な論集

球文明」の窓を開く心の糧として、とくに「セベリア声明」がつむぐ希望のそよ風にふれる意味は大きい、といえましょう。

「かけがえない地球」へのまなざし

第2に、「地球環境問題」の暗雲という問題です。今日、人間の生命を豊かに育んできた地球の未来が、果

てしない危機にさらされています。いわゆる「地球環境問題」は、現代史の重大な挑戦として、まさに地球規模の「安全保障問題」として浮上しています。さらに、宇宙全体へのまなざしから、ほかならぬ「人間の環境問題」として大きく問われている、といえましょう。その望ましい解明と方位とは、どのようなものなのでしょうか。

かつて、旧・文部省の「重点領域研究」として、伊東俊太郎氏を代表とする「地球環境の変動と文明の盛衰—新たな文明のパラダイムを求めて」（通称「文明と環境」、1991-1993年）という、巨大な研究プロジェクトが組まれたことがあります。このプロジェクトは、日本における「初めての本格的な『地球環境問題研究』への取りくみ」として、各界の大きな反響を呼びました。事務局を「国際日本文化研究センター」におき、所長の梅原猛氏が顧問となり、また安田喜憲氏が事務局長をつとめました。私も、伊東代表の誘いとともに加わりました。

ここでは、とくに同研究が謳う「趣旨」に注目した

いのです。いわゆる「地球環境問題」に対する基本視角として、その要点をまとめたものです。それは、1、まず人間自らの自然観や世界観にかかわる根本問題としてとらえる 2、広く人類史および地球史上の歴史的な検証を試みる 3、最終目標として人間と自然が共生する「新たなパラダイム」の創造を目指す、というものです。地球環境問題の本質は、ほかならぬ「人間と自然の喪失」にかかわります。まず、人間自身の内的な自己省察が不可欠です。今日、「かけがえのない地球」の自滅をどう防ぐか。「地球文明」にいたる試練の道程として、ほかならぬ自己変革の途が問われている、といえましょう。

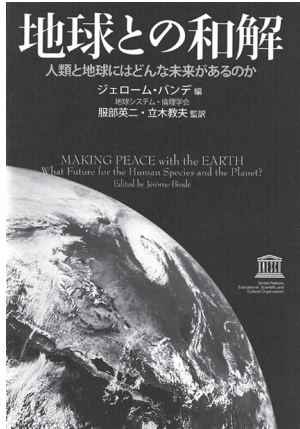
『歴史を変えた『沈黙の春』』

それでは、明日の「地球文明」と自己変容の途について、若干の重要な論点を提示したいと思います。その先駆的な著作として、レイチェル・L・カーソンの『沈黙の春』（1962年、青樹籜^{りょういち}一訳、新潮社、1964年）があります。本書は、歴史を変えた「20世紀のベスト

セラー」として注目されました。その後も、国連の「人間環境会議」（1972年）等を巻きこんで、多くの論争を呼びました。また、今日では、その「再評価」の気運も高まっています。つい最近のことですが、「沈黙の春」レイチェル・カーソンの警告」というNHKの特別番組も組まれました。

カーソンは、いち早く当時の「農薬禍」による自然破壊や人体障害を指弾し、今日の「公害問題」に警告を発しています。現代の病は、まさに「人間に無害である」と喧伝されたアメリカの農薬「DDT」にはじまるのでしょうか。他方、新たな「放射能」事故や汚染への予見があることから、先の「東日本大震災」「3・11」の際にも、大きな話題となりました。ご承知のように、世界的に名をなす美しい三陸海岸は、「ものみな萌えいずる春」に突如として「死に絶えし春」と化し、空前の悲劇の誕生ともなりました。

ところで、カーソンは今日におよぶ「公害問題」の起源について、広く「人類文明史」の再考という視点からとらえています。たしかに、その直接的な要因と



ジェローム・バンデ編『地球との和解』（2007、邦訳2009）。「21世紀の対話」として、ユネスコが中心となって編んだ論集。今日の地球史および人類史的な課題から、未来世代につなぐ「新しい地球倫理」を打ち出している

して、近代にみる工業化の背景や製薬資本の営利主義といった問題もありましょう。その点で、各企業の責任も問われましょう。しかし、カーソンは、むしろ「生命史における人間」という広大な視点から、問題の本質的な意味を見定めようとしています。いわゆる、これまでの狭隘な「ヒト中心主義」に対する挑戦です。

ここに、あえて人類文明史を虚心に省みるとしませう。初期の「採集経済」時代はともかく、その後の「牧

畜・農耕」時代から今日まで、とくに「ヒト中心主義」の観点が自然を支配してきました。たとえば、人間本位の利用目的にそって飼育技術を改良し、また栽培技術を改変したりしました。その暴挙によって、本来は安定した生態系の破壊がすすみ、総じて自然界全体の秩序も崩れさろうとしています。もっとも、カーソンは、その解決策はまだ「暗中模索」としながらも、人類が重大な「別れ道」に立っていることを強調します。まさに、「地球文明」の自己変容の途として、カーソンの全体論的な視座と根源的な思考に魅せられるものがあります。

人類の「地球との和解」に向けて

つぎに、ぜひとも注目したい著作として、ジェローム・バンデ編の『地球との和解—人類と地球にはどんな未来があるか』（2007年、服部英二・立木教夫監訳、麗澤大学出版会、2009年）があります。本書は、ユネスコが立ち上げた「21世紀の対話」というフォーラムの一環として、とくに「副題」に沿うシンポジウム（2

006年)の成果を収めたものです。なお、このパリで行われたシンポジウムには、かねて環境問題に造詣の深いハビエル・ペレス・デクエヤル国連元事務総長や世界的な衝撃をあたえた『成長の限界』(ローマ・クラブ、1972年)の主筆であるデニス・メドウズ、そして日本から松浦晃一郎ユネスコ事務局長や服部英二氏等の代表的な識者が出席しています

本書の冒頭には、当時の「地球システム・倫理学会」会長である伊東俊太郎氏の「日本語版への序文」が寄せられています。ここでは、本書を評して、21世紀の「地球史・人類史」上の大転換期を生きぬく指針として、「もつとも貴重な提言の書」との賛辞をおくっています。事実、本書を開きますと、各分野の第一人者が、まさに人類の死活問題となる「地球環境問題」のすべてを明かしています。いわゆる、気候変動・生物多様性・水問題等から、未来的「倫理」にわたる実証的な解明がみられます。さらに、前途の具体的な解決試案が、いとも明快に示されています。

ここでは、とくに「地球文明」の枢要課題として、

その精神的な礎となる「新しい責任の倫理」について検討しましょう。フランスの著名な現代哲学者であるミシエル・セールは、本書に「自然契約への回帰」(第5部)という論考を寄せています。いわゆる、人間と自然との共生を目ざす新たな未来倫理の提唱です。もつとも、その原点となる著作として、すでに『自然契約』(1990年、及川馥・米山親能訳、法政大学出版局、1994年)が出版されています。いずれも、「地球環境問題」の哲学的な深層と課題にせまる秀作です。

新しい未来倫理と「自然契約論」

そのミシエル・セールが説く「自然契約論」とは、どのようなものでしょうか。皆さんは、きつとフランスの社会思想家ルソーの『社会契約論』(1762年)を思い浮かべることでしょう。事実、ミシエル・セールの「自然契約論」は、その有名なルソー説に対抗して唱えられたものです。まず、ルソーの「社会契約論」について見れば、彼自身の独創的な自然観や社会観、とくに政治思想がよく示されています。すなわち、原

初的な自然状態は、まず「社会契約」によって市民社会となり、そのうえに国家が成立することを説きます。ここでは、あくまでも「自然」に対する社会や国家の先行性と優位性が前提となります。もつとも、ルソーの見解や功績については、色んな議論の余地もありましょう。しかし、その「近代自然法」を基とする「自然状態」の設定は、いまや「単なる擬制」とのそしりを免れません。

では、ミシエル・セールのほうはどうでしょうか。その著『自然契約』では、人類と地球の関係を非常に分かりやすく説明しています。すなわち、「寄生者」（人類）と「宿主」（地球）の間柄に譬えています。今日、寄生者である人類は、その身勝手な権利の濫用によって、あたかも宿主の地球を破滅に追いこむかのようです。かのルソーは、人間や国家の権利を主体とし、自然に対する寄生的な関係をいわば正当化した、ともいえましよう。

この点、ミシエル・セールの場合は、すべての自然が、すなわち「生きとし生けるもの」そのものが、新しく

権利の主体となります。その契約は、人間とモノとの間、および自然と国家との間でも交わされるのです。もつとも、その前提には、自然やモノに権利の主体があるとする「無言の承認」があります。このような論法は、一見、これまでの常識的な思考や契約概念に反することになりましょう。それだけに、自ら告白するように、多くの反論や批判を浴びることになりました。いわゆる、人間のように倫理的で道徳的な主体でない「自然」は契約関係に入れない、との裁定です。

さらに、ミシエル・セールの「新しい命題」について、その内奥にひそむ心象と真意を垣間みるとしましょう。まず、新たな「自然契約論」を唱える思想的源泉です。その原風景には、かつて彼自身が慣れ親しんだ「家族」（ファミリア）があります。

ここで、ひとまずヨーロッパ中世の、あるいは昔の日本の農村風景を思い浮かべてみましょう。そこでは、独り人間集団だけが住んだものではありません。同一の屋敷内では、人間と動物が、たとえば牛や馬やひな鳥が、あるいはその付属小屋や生活上の家具・道具等が、ほ

どよく住み分けをしています。それらが、相互にかけがえのない存在として、むしろ渾然一体となっているのです。

元来、「家族」の意味とはどのようなものでしょうか。

たんに、出生地と血統による人間的な家族だけを指すではありません。それこそ、人間も家畜も諸道具類も、さらに土地（農地）をも共同使用する、のどこで平和なものでした。そこには、「人と人たらざるもの」の間の、新しい関係と契約の原初的な範例が見られます。「自然契約論」の意図は、このような「家族」の原形と申しますか、望ましい事例を基として、その現代への再生を説くものです。来たるべき宇宙的な目標は、地球上のすべての存在をひとしく結ぶ「世界的な家族」の形成にある、ともいえましょう。

ご存知のように、今日、国連をはじめ多くの国際機関では、世界的な「自然環境」の破壊を憂慮した熱い討議を交わしています。いわゆる、水、空気、気候、そしてエネルギー等の深刻な問題です。しかし、今後の大きな課題として、現況のような「国益」のみを代

表する国際機関の改造も不可欠となりましょう。それは、従来の人間関係を主眼とした「国家」観をこえる、ほかならぬ宇宙的な「自然契約論」の展開を期したものです。

さいごに、ミシェル・セールは、この「自然契約論」が織りなす新たな連結として、あえて人間関係の脈路を探索します。その望みを託す「唯一の当事者」をあげれば、それは未来世代であると結んでいるのです。つまり、人間と自然との共生を目ざす新しい契約は、希望の未来をはぐくむ「自分自身」との契約ともなるのです。このような、人類精神史の改宗と英断こそ、21世紀の「地球文明」を導く未来倫理となりましょう。また、新しい「世界的な家族」の蘇りを待つ希望の源泉ともなりましょう。いま、悠久の「母なる大地」と人類史を再考する原点として、さらに人類を滅亡から救う「地球との和解」として、ぜひとも心に留めたいメッセージです。そこに、現状の日本をふくむ先進諸国の傲りが問われることは申すまでもありません。

Ⅲ. 「聖なる旅」の比較文明学 ——「人類共有の遺産」を求めて

「巡礼文明論」の提唱と美の回廊

もうすでに、予定の講演時間も過ぎ去ろうとしています。そこで、私なりの「地球文明」への旅路を急ぐことにしましょう。

つねづね、未知なる世界への旅は、自己を他者に照らして見つめる「自己観照」の泉となります。また、独りよがりの迷妄を解く「自己超克」の舞台ともなりましょう。その旅の原型として、とくに宗教的な意図を秘める旅として「巡礼」があります。その巡礼行は、時として「聖と俗」あるいは「宗教と文明」を結ぶ、貴重な架け橋ともなりました。

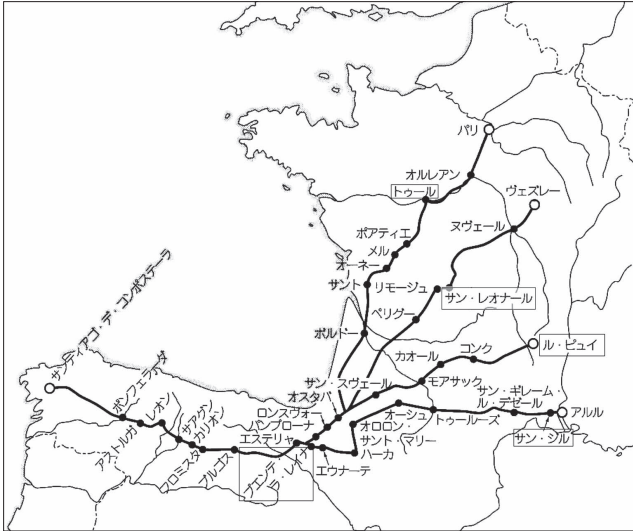
私自身、これまで「比較文明学」の一環として、新たに「聖なるもの」の先験的な定義を超える「巡礼文明論」を提唱しております。すなわち、世界の東西にわたる「聖なる美」の回廊を踏査しながら、人類史の心

性に通底する「象徴価値」を開示できたらとの思いです。その観点から、おもにヨーロッパ・地中海世界を起点に、世界の知られざる聖域を巡り歩いてきました。

ちなみに、手もとのデータを見ると、これまでの「巡礼・文明史紀行」と称する「第1期」（全17回、1978-198年）では、足しげく訪問した中世の教会・修道院（モスク・仏教寺院）が746箇所となっています。その折の全体的な知的景観と主要ルートについては、かつて『旅の比較文明学——地中海巡礼の風光』（世界思想社、2007年）として刊行したことがあります。旧知の青木やよい氏は、同書を評して、「高度に学問的内容をもつ旅の実体験から、人類規模の『知の共生』を示してくれた得難い書」との過分な新聞寄稿を寄せています。

以下、私なりの旅の記録として、とくに今日の「地球文明」論にかなう話題や風景を、少しでも多く提供できたらと思います。まず、第1回の旅路となったのは、ヨーロッパ中世史上もっとも有名な聖地であり、聖ヤコブの墓所ともされるスペインの「サンティアゴ・デ・コンポステーラ」（1978年）です。その当時は、

まだコンポステラの名を知る人も少なく、ましてスペインの「最果ての地」を目ざす巡礼者は稀でした。ちなみに、ユネスコの「世界遺産」に、このコンポステラ（旧市街）が認定されたのは、かなり遅れて1993



フランスからのサンティアゴ巡礼路——「4つの道」(吉澤五郎『旅の比較文明学』より。一部改変)



サンティアゴ・デ・コンポステラ大聖堂。キリストの12使徒のひとり聖ヤコブ（スペイン語で「サンティアゴ」）の遺体があるとされ、ローマ、エルサレムと並ぶ「西欧キリスト教世界の三大巡礼地」のひとつとなる。聖ヤコブは、イベリア半島でのイスラーム勢力との戦い（レコンキスタ）を導く精神的なシンボルとなり、スペインの守護聖人とされている

年のことです。
参考までに、その道案内となる基本文献と主要ル

トをご紹介しましょう。と申しますのも、最近では、日本のグループ・ツアーとして「コンポステラ巡礼」も流行のようです。しかし、残念ながら、正統なテキストに見合うようなルートは、なかなか見当たりません。本来、この中世巡礼を導くテキストとして、有名な『聖ヤコブの書』（12世紀中葉）があるのです。それでは、中世巡礼の真実を求めて、同書の貴重な「サンティアゴ巡礼案内書」（第五の書）に沿う主要ルートを概観しましょう。

まず、フランスを出発点とする「四路」（北からトゥール、サン・レオナル、ル・ピュイ、サン・ジルの道）があります。ヨーロッパの各巡礼者は、それぞれのルートをたどりながら、やがてピレネー山麓の「2つの峠」（ソンプルール、ロンスヴォー）のいずれかを越えます。私も、かつて雪の舞うソンプルール峠や、春うららかなロンスヴォー峠を越えたことがあります。その後、南北に分かれたルートは、スペインのブエンテ・ラ・レイナ（王妃の橋）で合流して一本道となります。ここで、イベリア半島の北端を横断する「フランス人の道」に導かれて、

一路、大聖地コンポステラを目ざすことになります。

ここで、念願の「サンティアゴ・デ・コンポステラ大聖堂」の偉観にふれるとしましょう。この映像は、小高い「エラドゥーラ公園」の丘から見た大聖堂の全景です。ことに、威厳に満ちた壮大なバロック様式が印象的です。聖堂に向かうと、まず正面入り口の「栄光の門」（12世紀後半）に迎えられます。その「タンパン」（半円形・小壁）の中央に座す厳然たるキリスト像や聖ヤコブ像をはじめ、一連の彫刻群が見事です。とくに、その表現力、細部技法、多色装飾等がかもす全体の統一性は、まさに圧巻です。美術史上、「スペイン・ロマネスク様式の最高傑作」と称されるゆえんです。

「西欧文明の誕生」とコンポステラ巡礼

もともと、私の「コンポステラ巡礼」に寄せる関心は、通常の「聖なる信心」を欠いて不謹慎なのですが、じつは「ヨーロッパの誕生問題」にあります。その主要な論点について、簡単に述べるとしましょう。まず、歴史学上の問題です。コンポステラ巡礼の動因は、

スペイン・キリスト教徒の対イスラーム抗戦としての「レコンキスタ」（国土回復運動、711-1492年）を背景としています。その際の精神的シンボルとなったのが、じつはスペインの使徒として崇められた「聖ヤコブ」なのです。いわゆる、広く「文明の誕生問題」として、とくに「西欧文明」の場合には、その外的構成となる「イスラーム文明」の影響を無視できません。

つぎに、美術史上の問題です。ヨーロッパキリスト教美術の「偉大な創造性」と謳われる「ロマネスク美術」（10世紀末-12世紀）は、たしかにコンポステラ巡礼の路上に開花したものです。しかし、その源泉には、イスラーム主導の「モサラベ美術」（9世紀末-11世紀）や、シリア・アルメニア写本を手本とする「ベアトウス写本」（8世紀末-10世紀）といった東方の遺産が、滔々と流れています。やはり、西洋美術史で黙過されがちな「影響文明圏」の問題をなおざりにできません。

さらに、聖なるコンポステラ巡礼の根基を問う「聖性論」の問題があります。通常、その淵源は、靈驗あらたかな「聖ヤコブの墓所」に求められます。しかし、

もう一度、コンポステラの位置を再確認しましょう。それは、ガリシア海を西方にのぞむ「最果ての地」にあります。きっと、その地に古くから伝わる「海の神話」や、またはケルトの「他界観」につながるものがある、



『ベアトウス写本』から「雲の中の顕現と地上の人びと」（エルク・エスコリアル修道院、10世紀）。西洋美術史上、イスラーム美術と融合する「モサラベ美術」の典型として有名。終末の予感を秘めた「最後の審判」を題材とし、とくに強烈な表出力や鮮烈な原色主義が特徴である。いかにも「阿弥陀聖衆来迎図」の仏画的印象を誘う

と考えられます。つい最近も、じつはケルト文明史家として名高い鶴岡真弓氏と、ケルト研究の最前線とその貢献を語りあったことでした。まさに、聖地コンポステラの深層に、「原初海洋」の宇宙的な饗宴を見るかのようなのです。

あらためて、「西欧の心臓」とも称される「コンポステラ巡礼」を省みましょう。その底流には、人類が創りあげた多様な「文明のモザイク模様」が刻まれており、また相互を結ぶ虹の恩寵^{おんちよう}として「聖なるもの」の普遍性^{はんぺんせい}がゆたかに漂っているのです。

「母なる大地」と「ホモ・サピエンス」

（賢い人）のゆくえ

まことに残念ですが、もう時間切れとなり、深く立ち入ることができません。以下に「聖なる旅」の比較文明学として、とりわけ「コンポステラ巡礼」の旅路を彩る「3つの論点」をご紹介しますと思います。

これまでの、「1. 『サンティアゴ巡礼』の歴史景観——『西欧の心臓』と東方の遺産」に続く未踏のテーマは、

「2. 『黒い聖母』の謎を解く——大地母神信仰と白いマリア」「3. 『ベアトウス写本』と『阿弥陀聖衆来迎図』——『聖なる美』の普遍性」となります。いずれも、多様な宗教芸術の歴史的な精華と発展をたどるものです。しかし、その源流では、「聖なる美」の豊かな旋律が相互に深く響きあっているのです。いわゆる、宗教



「善き希望の聖母」（フランス・ディジョン、ノートル・ダム聖堂、12世紀。高さ84cm）。「黒い聖母」の前身ともなる有名な像である。とくに、大きく細長い顔をしめる特異な眼差し、鼻筋、口もと等が「魔性の神秘」を奏でる。そこに、異教となる「大地母神信仰」の残照を見ることができよう

芸術の根源性として、相互の関係性と一貫性を秘めている、ともいえましょう。すでに、西洋美術史の大家である柳宗玄氏が明察するように、歴史上の異なる文化表象も、その本質はほとんど変わらないのです。要するに、東西を究める宗教芸術の真理として、その源泉は「太陽が一つ」であるごとく、同一であるともいえましょう。

これまで、私自身の道行きも、明日の「地球文明」に向けて、歴史上の表層に染まる「差異の目録」を超え、その深層にひそむ「人類共有の遺産」を心に刻む希望の旅路でもありました。総じて、一連の「巡礼・文明史紀行」を振り返るとき、数知れぬ「知の連鎖」や「共生の風景」に出会います。歴史上に開花する、一面多様な文化や文明の相貌も、つまるところ、「人間」(ヒト)という未熟な種の同一性に根ざしています。

他面、かつてアポロ宇宙船が描いた「地球の肖像」は、どうでしょうか。その光景は、人間と自然をひとしく抱く「美しい生命体」として光り輝いていました。少なくとも、そこに、今日のような荒々しく線引きさ

れた国境や国家群を見ることはできません。いま、人類は自ら命名した「ホモ・サピエンス」(賢いヒト)という自負の真偽が、地球46億年の歴史のなかで新たに問われることになりました。

さいごに、本日の「地球文明」の肖像画を下ろすまえに、お別れの「エピローグ」として、あらためて「トインビーのことば」をお伝えしたいと思います。

「人類は、母なる大地を殺すのであろうか。それとも救うのであろうか」「母なる大地の子である人間は、仮に母を殺す罪を犯すなら、それ以後生きのこることはないであらう」(『人類と母なる大地』、1

976年)

この、トインビーの遺言ともなる「メッセージ」は、明日の「地球文明」への道として、その命運を告知し、新たな「生への選択」をせまるかのようです。

ご静聴、ありがとうございました。

(よしざわ ごろう／麗澤大学比較文明文化研究センター

客員教授・比較文明学会元会長)